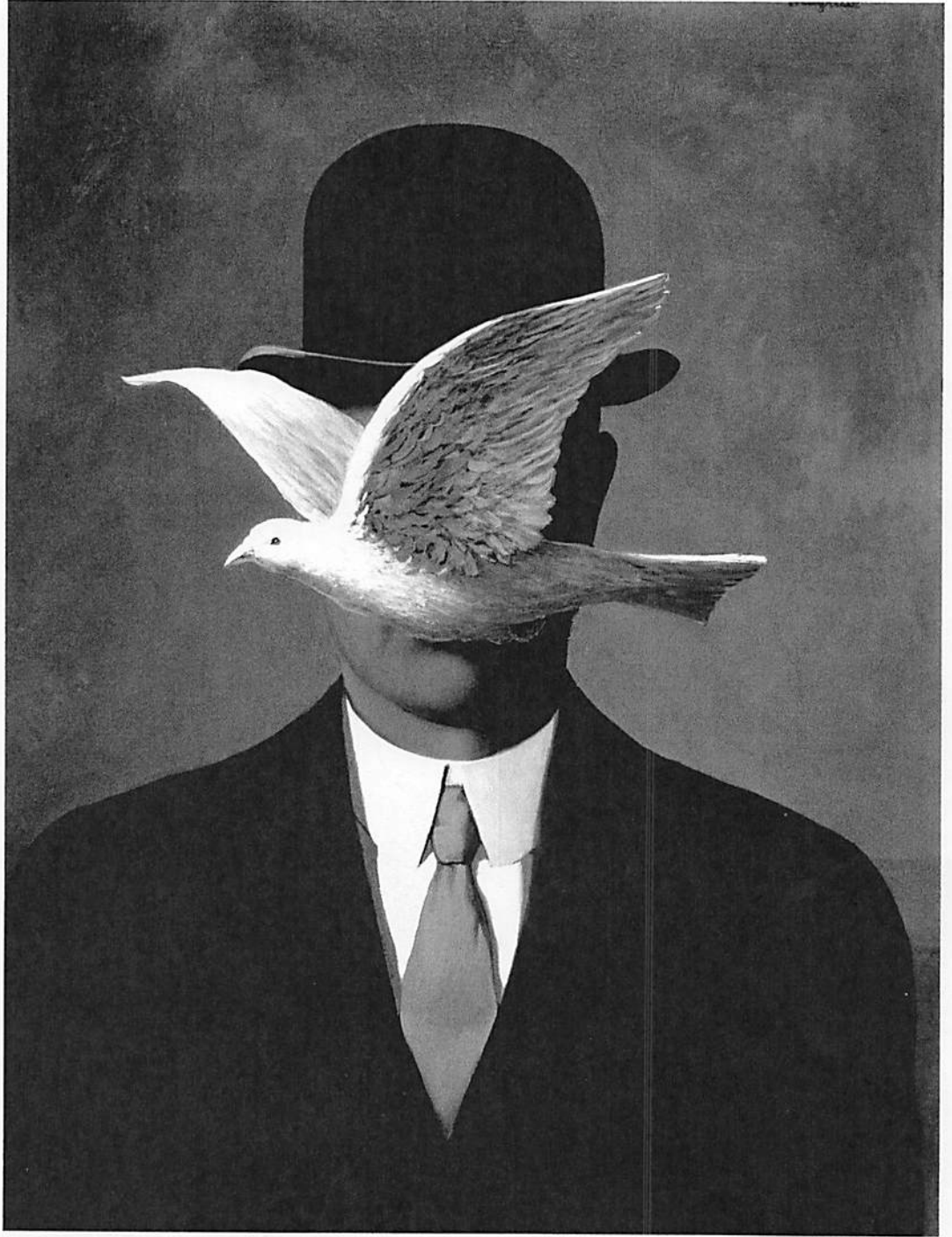


作  
木下順二

演出  
丹野郁弓



# オットーと呼ばれる日本人

民藝の仲間

429号

# オットーと呼ばれる日本人

36	次回公演『ミツバチとさくら』	2	日本が日本であるためには 木下順二
34	『やさしい猫』前回の舞台より	8	雑記 丹野郁弓
32	2024年劇団民藝上演作品	10	再び、神と人とのあいだで 最上敏樹
30	築地小劇場開場百周年(二) 築地小劇場と二人の女性 ——山本安英と江津萩枝 青木笙子	12	4人の出演者が語る 交差する時代とことばのなかで—— 神敏将 中地美佐子 千葉茂則 桜井明美
28	木下順二作品劇団民藝上演年表	14	稽古場から／出演者紹介
26	尾崎秀実が捧げた忠誠 加藤陽子	22	シリーズ 会いたい Part 2 加藤哲郎さん 聞き手 河野孝

2024年5月17日(金)～26日(日)  
新宿・紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

劇団民藝 神奈川県川崎市麻生区黒川 649-1 ☎044(987)7711  
劇団民藝青山事務所 東京都港区南青山 2-4-6-404 ☎03(3401)5131

【表紙・本文デザイン】有山達也、山本祐衣  
【表紙絵】René Magritte, "Man in a bowler hat", 1964  
【稽古写真】稲谷善太  
【編集】「民藝の仲間」編集部  
2024年5月17日 第1刷

助成=文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
独立行政法人日本芸術文化振興会



## 民藝アーカイブシアター DVD販売中



創立70周年記念公演  
『思い出のチェーホフ』  
作=レオニード・マリュエギン  
訳=牧原 純 演出=丹野郁弓  
出演=奈良岡朋子、櫻山文枝、  
日色ともゑ、西川 明、  
佐々木梅治、篠田三郎  
価格=5,500円(税込)  
「民藝の仲間」会員特別価格=5,000円(税込)  
収録時間=2時間15分

幻の舞台が今、  
スタジオ演劇としてよみがえる!

2020年、緊急事態宣言発出により公演中止となつた『思い出のチェーホフ』が映像作品として完成。新たに収録した映像に、奈良岡朋子の舞台音声(1971年3月12日・紀伊國屋ホールで録音)をもとに出演シーンを加え再構成。初版限定500枚を「オットーと呼ばれる日本人」劇場ロビーで限定販売。



クリスマスを舞台に  
激動の5年間を描く、斎藤憐の代表作!



『グレイクリスマス』

作=斎藤 憐 演出=丹野郁弓  
価格=4,400円(税込) 収録時間=2時間22分  
2022年4月収録



「人の世に熱あれ、人間に光あれ。」  
2022年8月に民藝稽古場で上演した話題作!



稽古場特別公演『破戒』

原作=島崎藤村 脚色=村山知義  
演出=岡本健一  
価格=4,400円(税込) 収録時間=2時間10分

お申込み・お問合せ  
TEL 044-987-7711 FAX 044-986-0034 seisaku@gekidanmingei.co.jp  
劇団民藝・制作部まで

# 加藤哲郎さん

【聞き手 河野孝】

伝説的スパイマスターのリヒャルト・ゾルゲと尾崎秀実が処刑されたから今年には80年。劇団民藝はゾルゲ事件を題材とした木下順二作『オットー』と呼ばれる日本人(1962年初演)を上演する。ゾルゲ事件は発生前から謎も多く、時代時代に新たな資料や発見が明らかになって実像や評価も変わってきている。今回、初演から4度目の上演に際して、「尾崎・ゾルゲ研究会」代表を務め「国際歴史探偵」との要望も高い加藤哲郎・一橋大名教授に事件の背景、意味などについて新たな観点からの解説をお願いした。

「オットー」と呼ばれる日本人」をご覧になったことは？

加藤 東京大学新聞の記者をしていた1966年に一度見ています。新劇の舞台を見たのはこれが初めてでした。

——再演のときですね。芝居は結構ご覧になりますか。

加藤 時間的な余裕もなく、あまり見ません。ただ、『ワイマール期ベルリンの日本人』(岩波書店、08年)の研究では、生前の千田是也さんに幾度もお会いし、村山知義や土方与志の留学時代を調べました。メキシコ大学院大学客員教授の時に現地調査して、菅孝行編『佐野碩』——人と仕事 1905-1966(藤原書店、15年)に寄稿しています。佐野はプロレタリア

演劇の先駆者として活躍した後、1930年代にソ連でマイエルホリドに師事し、スターリン粛清で国外追放になってメキシコに渡り、「メキシコ演劇の父」と呼ばれる様になりました。

——加藤先生は英国、米国、ドイツ、インドなど海外経験が豊富ですが、ゾルゲ事件に関心を持ったきっかけは何だったんですか。

加藤 私がゾルゲ事件に関心を持ったのは、沖縄の差別と移民の問題からです。

——沖縄問題から？

加藤 ソ連で粛清された日本人の研究を1990年代にやっていました。

——『モスクワで粛清された日本人』(青木書店、94年)という本を出されていますね。

加藤 1930年代の在露日本人は100人ぐらいですが、野坂参三を例外としてごとく日本のスパイとされ、大多数が銃殺で、生き延びても強制収容所(ラーゲリ)送りや国外追放になりました。その中の10人近くが沖縄出身です。沖縄から職を求めてアメリカ西海岸に渡り、人種差別と過酷な労働条件に抵抗して米共産党に入り、中国人やフィリピン人労働者と共にストライキをして国外追放になり、日本に帰れば治安維持法で捕まるので当時「労働者の祖国」と呼ばれたソ連に渡りました。ロングビーチ事件といえます。

——どこかの「地上の楽園」みたいなユートピアですね。

加藤 そのアメリカからソ連に亡命して銃殺された沖縄人の1人が宮城与三郎で、ゾルゲ事件で捕まる画家の宮城与徳のいとこでした。

——劇中では「ジョー」と呼ばれる日本人」に当たりますね。

加藤 沖縄の人たちにとつてのゾルゲ事件は宮城与徳に収斂します。カリフォルニアに移民した与三郎たちはソ連に逃げて粛清され、与徳は米共産党から日本に派遣されて、初めは短期間で帰れるという約束だったのに、一〇年近くも謀報活動に使われまくりました。

——逮捕されて、未決勾留中に結核で獄死してしまっていますね。

加藤 そんなことをスターリン粛清研究として発表しました。朝日新聞モスクワ支局長だった白井久也さんや社会運動史家の渡部富哉さんが中心の「日露歴史研究センター」に招かれて話をしたら、新しい視点だと歓迎されました。私は政治史の研究で、ロシアの公文書館でソ連時代の秘密文書を集め、アメリカ国立公文書館でGHQやCIAの文書を集めていましたので、その副産物でした。

——それからさらに調べていくわけですね。

加藤 敗戦前にゾルゲ事件が新聞報道されたのは、1942年5月17日の司法省発表一回だけでした。ミッドウエー海戦の直前です。

——控えめな新聞記事ですね。

加藤 新聞はどこもトップ記事は南洋で米軍を壊滅させた大本営発表で、下のほうに「国際諜報団検挙さる」という4段出しの記事が出てきます。不思議なのは、ソ連やドイツという名前が一言も出てきません。当時ドイツは同盟国、ソ連とは中立条約があつて親善国です。それで報道が統制され、国際共産主義のスパイ団という話になっています。

——ドイツは初め駐日大使がゾルゲの逮捕に猛烈に抗議していますね。

加藤 ゾルゲはオット大使の私的顧問を務めるほど信頼されていました。事件では治安維持法違反などで100人以上が尋問を受け、最終的に35人が被告になりますが、新聞に出たのは「内外人五名が首魁」とゾルゲ、尾崎、マックス・クラウゼンという無線技士、ジャーナリストのブーケリッチ、宮城与徳です。ただし41年に公布されたばかりの国防保安法は国家機密を漏らした者を厳しく処罰する法律で、尾崎の友人で公爵家の西園寺公一、元首相の息子の犬養健も逮捕されました。尾崎、ゾルゲは死刑判決を受け、ソ連の革命記念日だった44年11月7日に絞首刑にされます。

——死刑はこの2人だけで公表されませんでした。

一般国民は全然知らなかったのですね。

加藤 国民がゾルゲ事件を知るのは戦後です。尾崎秀実が獄中から妻や子供に宛てた書簡集『愛情はふる星のごとく』(46年)が出てベストセラーになる。ゾルゲの愛人だった石井花子『人間ゾルゲ』(49年)も出てきます。戦前日本にもファシズムに反対し行動した反戦グループがいたという評価です。それはソ連に情報を流すという行為であつたけれども、ソ連も日独伊三国同盟に対抗する連合国の一員で反ファシズムの一翼だったというのが、48年ごろまで支配的な見方でした。

——それが一転して流れが変わる。

加藤 占領政策の転換、いわゆる「逆コース」と一緒です。1949年2月にGHQのウィロビー將軍率いる参謀二部(G2)の作った米国陸軍省報告が

出て「赤色スパイ団」とされます。「ウィロビー報告」ですが、背景にはアメリカのマッカーシズムがありました。日本の特高警察記録にもつき被告の名前を全部出し、事件の発覚は戦後日本共産党の指導者になった伊藤律が戦前警察に洩らした情報だったとしました。

——マッカーシズムって「赤狩り」ですね。

加藤 はい。すでにハリウッドの映画関係者への弾圧が始まっていました。ちょうど新中国建国の頃で、ウィロビー報告の狙いは米国人作家のアグネス・ス



メドレーや毛沢東の会見記を書いたエドガー・スノーたちを共産主義者の非米活動だと告発するために、戦前日本のゾルゲ事件を典型的事例として出してきたのです。ソ連は世界中で共産主義者を使つたスパイ活動をしている、米国の政府機関内にも、在外公館や報道関係者の中にも「赤色スパイ」は潜り込んでいるというのです。

——捏造ですか。

加藤 スメドレーは自分は共産党員ではないと陸軍省に抗議し、いったん認められる。ただしイギリス

へ渡ってすぐに病死します。木下順二の劇中では「宋夫人」と呼ばれるアメリカ人」がスメドレーのことで、尾崎とゾルゲとスメドレーは共同租界の中華料理店で出会う設定になっています。また劇中では林(はやし、中国音でリン)という偽名を持つ日本人が三人と一緒にいます。この林が、尾崎の友人で大陸浪人だった川合貞吉で、ウィロビー報告ではスメドレー邸での三人の会合に同席した唯一の生き残り証人とされています。

——川合もゾルゲ事件で検挙されていますね。

加藤 懲役10年です。ところがゾルゲと尾崎がスメドレー邸で秘密の会議を持ち自分も同席したというのは、実は川合の作り話だったのです。私はアメリカの国立公文書館で調べ確認したのですが、なんと川合は米軍のスパイで、月二万円の金を渡され、スメドレーが共産主義者だったと証言するために、スメドレー邸での会合をでっち上げたのです。

——ゾルゲ事件発覚のきっかけは、40年に検挙された日本共産党の伊藤律が出所と引き換えに元米共産党員の北林トモ(劇中、南田のおばちゃん)を密告し、その北林の監視で宮城が捕まり、「ゾルゲ諜報団」の検挙に連なつたと言われましたが？

加藤 G2の占領軍民間情報局(CIIS)に属していたポール・ラッシュ中佐とウィロビーがお膳立てしたストーリーです。当時の日本共産党の指導者だった伊藤律をおとすために党内に疑心暗鬼を広めるためと、スメドレーを共産主義者に仕立て上げるという2つが大きな目的でした。そのシナリオに沿って、川合貞吉が詳しく証言したのです。ラッシュの方はもともと聖公会牧師で、「アメリカカン・フットボー

ルの父」「清里の父」(山梨県北杜市)として有名になりますが、占領軍随一の日本通として、裏の顔があったのです。尾崎秀樹の「生きていたユダ」(59年)や松本清張の「日本の黒い霧」(60年)は、ゾルゲ事件に關しては「ワイロビー報告」をもとにしているもので、今日では訂正が必要ですね。

——先生が書かれた「ゾルゲ事件 覆された神話」(14年)は川合莊吉を否定してですね。

加藤 私の平凡社新書では、ゾルゲと尾崎が上海時代に会ったことを作ったのは、スメドレーではなく、米國共産党日本本部からコミンテルンの指示で中国に渡った鬼頭銀一だったと明らかにしました。鬼頭は38年に南洋パラオ島で不審死しますが、それでゾルゲ事件研究者みだりにされたのですが、実は私はゾルゲ事件について本を書いたのはこの新書1冊だけで、あとは国際シンポジウムなどの報告・講演記録や資料集の編集・解説です。

——ゾルゲの伝えられた情報の価値は、帝國日本の南進策を伝えたと言われますが……

加藤 関東軍は極東ソ連軍と対峙していましたが、ゾルゲは尾崎を通して御前会議で日本が資源獲得のため南に向かう方針を決めたという情報を得た。ならばソ連軍は西の戦線に兵力を回し独ソ戦に使うことができる。それでソ連軍はドイツに勝つことができるといのがゾルゲの大功績とされ、「大祖国戦争の英雄」「愛國者」と賞揚された理由でした。

——英雄に祭り上げていったのですか。

加藤 最新のフェニクス編「ゾルゲ・ファイル」(みすず書房、22年)に出てきますが、実はソ連崩壊後にゾルゲが送った通信文が650通も見つかって、——戯曲が書かれた時代状況は60年安保があった、木下自身が、これは日本人の「主体造出」の問題として書いたと書いてます。だからオットーという人物の中に、日本人が歴史の中で生きる主体的な問題が反映されていると思えます。

加藤 そのとおりです。木下順二は東西冷戦下のいわば日本の争点、尾崎秀実が反戦の愛國者だったか國を売った裏切り者かという議論に、正面から取り組んだといえます。

——なるほど。

加藤 木下順二は、60年安保の時点で、尾崎をもう一度復興しようと試みた。つまり、時代の流れに身を任す受動的個人ではなく、実存を賭けた主体的選択の重要性です。ジャーナリスト尾崎秀実が、ある種の個人的な使命感に駆られて國家の中核、近衛内閣の囑託になりながら、その内部である種の反抗をする。同時に家庭を愛してやまない日本人でもあったという、いわば近代化された人間像を尾崎に投影した形ですね。

ゾルゲの諜報活動のほぼ全貌がわかりました。それによると、確かに御前会議の南進情報はスターリンまで届いたけれども、他のルートからも情報はあり、もともと「二重スパイ」と疑われていたゾルゲ情報が決定的だったとはいえます。さらにフェニクスによれば、当時の日本からソ連に情報を送っていた諜報員はゾルゲだけでなく、ほかに5人以上いたと出てきます。

——え、そんなにも？

加藤 それも女性が多い人ぐらいい。ゾルゲの知らないところで、米國大使館やドイツ大使館にも秘かに潜入していた。全部コードネームなのでこれから研究が必要ですが、ゾルゲがいなくても、日本の情報はソ連に筒抜けだったかもしれないのです。

——ゾルゲ事件の映画も作られましたね。

加藤 古くは黒沢明監督の「わが青春に悔いなし」(46年)、最近では篠田正浩監督の「スパイ・ゾルゲ」(03年)がありますが、61年の日仏合作映画で、イヴ・ジャンピ監督が作り、妻だった岸恵子さんが主演した「真珠湾前夜」が重要ですね。3年後の64年、ソ連のクレムリンでの試写会で上映され、フルシチョフがこんな立派な人物がいたのかと驚いて胸をささせ、ゾルゲが英雄視されるきっかけになりました。それまでは、ゾルゲの存在そのものが認められていなかったのです。

——各書回復するわけですね。

加藤 その経緯は、ようやく最近、岸恵子さんの「岸恵子自伝」(岩波書店、21年)、オーウェン・マッシュューズ「ゾルゲ伝」(みすず書房、23年)刊行で、明らかにになりました。

——今改めて作品に感じることは？

加藤 60年安保を背景にした62年初演のころは、戦前・戦中の共産党の獄中非転向と並んで、尾崎やゾルゲのグループが思想的に節操を守ったという話が、それなりの感動を与えました。政府の國會強行採決や反対運動弾圧がありましたから、それへの反発が「オットー」と呼ばれる日本人が歓迎された時代背景だったでしょう。私が注目するのは、木下順二の戯曲を英訳して「愛國者と裏切り者」という英語の本に収めた米國人たちが、木下の描いた「オットー」尾崎秀実を、原爆を作った物理学者オッペンハイマーのマッカーシズムのもとでの苦悩と重ねあわせて理解しようとしていることです。2009年の訳ですから、アカデミー賞受賞映画の十年以上前です。最近ではロシアで「第二のゾルゲ・ゲーム」です。ブーチンがゾルゲを「愛國英雄」として讃え、左直後にウクライナ侵略が始まりました。愛國か売國かの苦悩を孕むゾルゲ事件の神話は、戦争が近づくと甦るのです。

——「尾崎・ゾルゲ研究会」は2022年11月設立ですが、経緯は何ですか。

加藤 「日露歴史研究センター」のメンバーが高齢化し18年に解散しました。私たちはその成果を受け継ぎ、若い世代に伝えていこうというのが趣旨です。デジタル技術を駆使して資料を収集、保存し、国際的ネットワークをつくって研究していきつもりです。

——会員は何人くらいおられるんですか。

加藤 メールで連絡がついているのは、海外を含めて100人くらいでしょうか。私の個人ホームページ「ネチズン・カレッジ」にニュースや資料がある

名書回復によってソ連側からも、米國ワイロビー報告とは別の資料が出てきた。この頃、みすず書房から『現代史資料 ソルゲ事件』という日本側の警察・裁判資料集も出始めて、60年代半ばから、本格的な研究ができるようになりました。「オットー」と呼ばれる日本人は、その直前62年が初演ですから、その後の研究成果は反映されていません。木下順二の戯曲は、2009年にアメリカの日本文学研究者による英語訳が「Traitors and Traitors」(愛國者と裏切り者)という本に収録されて出ていますが、中国語訳はないですか。

——中国語訳は聞いたことないですね。

加藤 上海時代については今、中国で新しい研究が出てきています。ゾルゲ、尾崎、スメドレーたちの活動のバックに中國共産党がいて、周恩来が指導者でした。周恩来とゾルゲの会見記録も出てきました。

——尾崎の理想は何だったのでしょうか。

加藤 日本も含めた世界のプロレタリアートの連帯のニートピアでしょう。尾崎秀実は、ソ連と共産主義化した中国・日本を加えたアジアを夢見て、それを当時論じられていた東亞連帯団体と重ね合わせて考えていたのです。

——ソ連の崩壊で新たな資料が大量に出てきたのが大きいようですね。

加藤 研究環境が変わり、事件への見方も違ってきました。世界的にはゾルゲが主人公で尾崎は第2バイオリンです。木下順二で戯曲を執筆したのは、敗戦直後の尾崎の書簡集ベストセラーから、冷戦下でワイロビー報告の「赤色スパイ」脱が支配的になった局面です。64年のソ連でのゾルゲの名書回復以前

はか、事務局長の愛知大学鈴木規夫教授の研究室を窓口にしていきますので、お気軽にアクセスしてください。\*

——加藤先生は細菌兵器開発に關わった旧陸軍731部隊のことも書かれています。先生の著作を見ると、歴史の中で隠された秘密とか真実を明るみに出されています。これからは世のため人のため、国際歴史探偵、としてさらなるご活躍を祈念しております。

\*尾崎・ゾルゲ研究会事務局  
愛知大学名古屋校舎鈴木規夫研究室宛  
mailto:rita@ega.nichi.ac.jp / 2022107@egmail.com

加藤哲郎 かとう・てつろ

1947年盛岡市生まれ。政治学者。尾崎・ゾルゲ研究会代表。一橋大学名誉教授。著書に「ワイマー期ベルリンの日本人」洋行知識人の反帝ネットワーク「ゾルゲ事件」覆された神話「731部隊と戦後日本」隠蔽と覚醒の情報戦「パンデミックの政治学」など。マッシュューズ「ゾルゲ伝」を共訳。ゾルゲ事件史料集成を編集・解説。WEBで「加藤哲郎のネチズン・カレッジ」(http://netizens.html.tokyo.nippon.ne.jp/home.html)を主宰。

河野 孝 こうの・たかし

1950年、東京生まれ。文化ジャーナリスト。演劇評論家。74年日本経済新聞社入社。海外駐在(テヘラン、カイロ、ロンドン)などを経て95年、東京本社文化部で編集委員として演劇・宗教などを担当。2015年に退社後、各種新聞、演劇専門誌「テアトロ」などで演評、コラムなどを定期執筆。